

あさ ひ 朝 日 遺 跡

調査の経過 朝日遺跡は、西春日井郡清洲町を中心に春日町、新川町、名古屋市西区にまたがる東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡である。これまで昭和44年から平成元年にかけて愛知県教育委員会、(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、(財)愛知県埋蔵文化財センターによって約90,000㎡が発掘調査されており、多くの成果を得ている。

今回の発掘調査は新資料館建設に伴うもので、愛知県教育委員会の委託事業として実施された。調査区は、遺跡の規模が最大となる弥生時代中期から後期の中心部の南西に位置し、国指定史跡貝殻山貝塚の南に隣接する地点である。

調査の概要 調査区の旧地形は、北部が微高地の南縁部に当たり、南部が後背湿地で低くなる形で復元できる。遺跡の基本層序は上位から、耕作土、灰色粘土、灰白色粘土～砂、黒色土、黄灰色シルト（ベース）の順に堆積している。検出された遺構は、中世以降、古墳時代、弥生時代の3期に大別される、中世以降の遺構は灰白色粘土上面で検出され、さらに鎌倉・室町時代と戦国・江戸時代に区分できる。古墳時代の遺構は黒色土上面で検出され、古墳群が確認された。弥生時代の遺構は前期の溝や貝塚、中期から後期の方形周溝墓などが検出されており、ほぼ弥生時代全時期にわたって遺構・遺物が展開していたことが認められた。

ここでは、中世以降と古墳時代の状況を中心に報告する。



第1図 調査区位置図 (1:5,000)

古墳時代 古墳時代の遺構には、古墳19基、道路状遺構1条、土坑などがある。

古墳はほぼ調査区全体で検出された。古墳の大半は浅い周溝を巡らし、墳丘を低く盛り上げたものと考えられる。墳丘の平面形は隅丸方形状で、一辺の長さは5～8mの規模を持っている。墳丘の上端面は削平されていたと考えられるが、一部に弥生時代の包含層を盛土した墳丘部と主体部と思われる土坑が残存しているもの（S Z 04・S Z 05・S Z 06）もある。主体部と思われる土坑は、平面形は不定形で石室を持たず、粘土槨や木棺の痕跡も確認することはできなかった。また、調査区北西部には弥生時代の貝塚の高まりが認められ、古墳（S Z 19）として利用された可能性がある。

周溝は幅が3～10mで浅く、隣接する古墳と共有している形となっている。周溝の切り合い関係は詳らかにできなかった。周溝は1～2ヶ所切れて陸橋部を形成するもの（S Z 07など）と、全周するもの（S Z 09など）がある。陸橋部を通じて掘り残し部に接続したもの（S Z 01など）も見られる。周溝内には灰白色砂やシルトが堆積しており、洪水によって埋積されたものと考えられる。

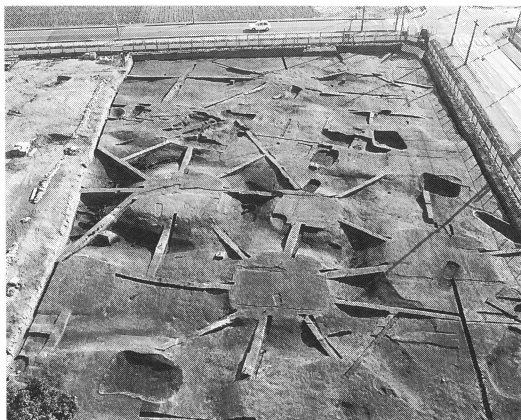
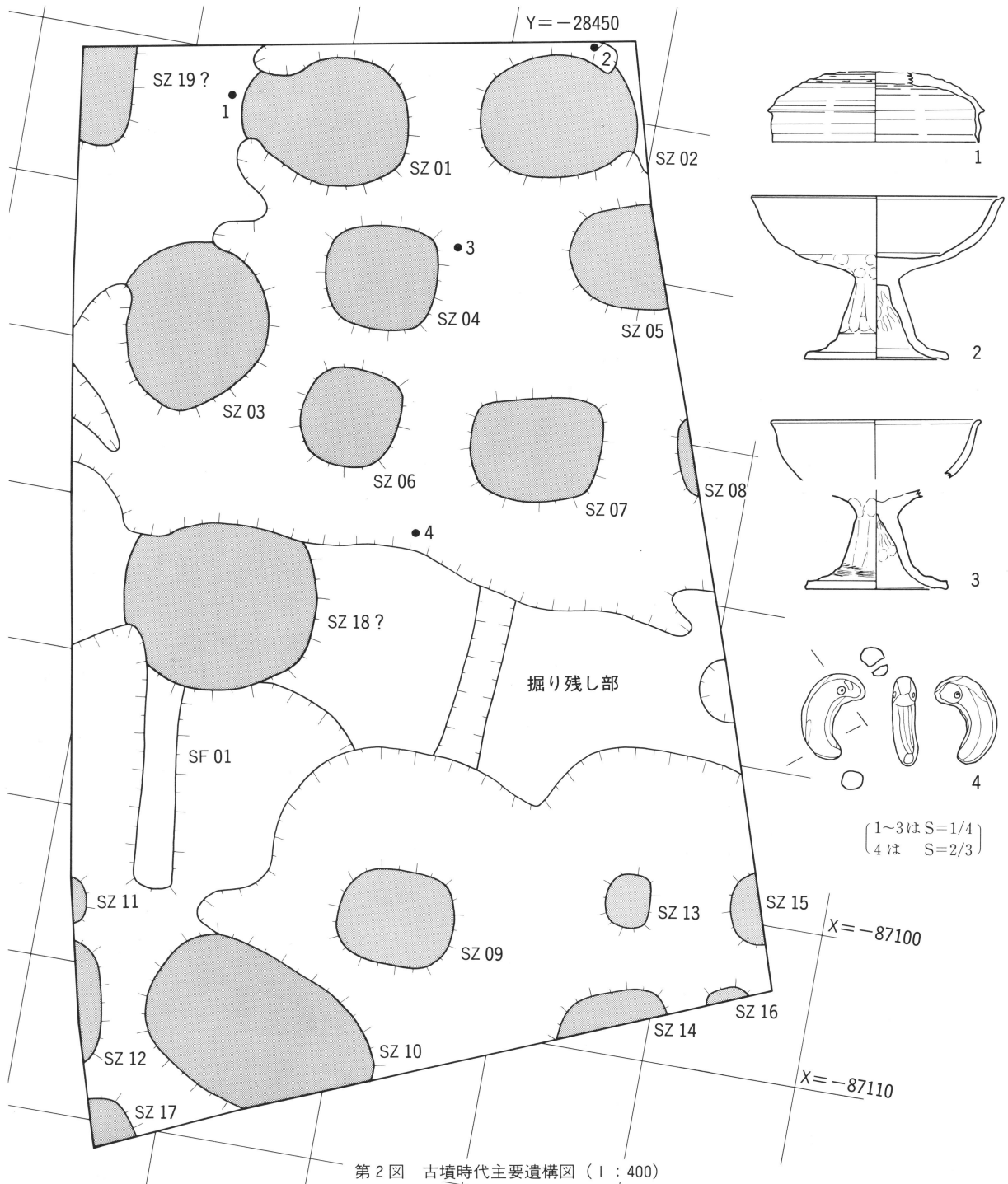
調査区北半部と南半部では古墳の形状や配置が異なっている。北半部の古墳（S Z 01～S Z 08・S Z 18・S Z 19）は比較的高い地点に立地していることから、やや墳丘を高く盛り上げられており、形状や配置が規格的になっている。一方、南半部の古墳（S Z 09～S Z 17）は墳丘が不定形で小さく、配置も散在している。北半部と南半部の古墳群の間には周溝を掘り残した部分があり、古墳群を分割している。掘り残し部には、溝と土坑の他に、南北に細長い道路状の一段高い高まり（S F 01）が認められる。

古墳時代の遺物は、調査区北半部から多く出土している。古墳周溝内からは土師器高杯（2・3）・甕や勾玉（4）や木製品などが、墳丘上の包含層からは須恵器杯蓋（1）・甕の破片などがそれぞれ出土した。これらの遺物から、この古墳群は5世紀後半から6世紀前半に造営されたものと考えられる。

中世以降 中世以降の遺構には方形土坑30基と溝1条などがあり、大きく2時期に区分できる。

鎌倉・室町時代の遺構には方形土坑が24基存在する。方形土坑は長辺が3m前後の長方形を呈しており、比較的垂直に掘り込まれている。S K 02やS K 23などのように均質手の灰釉系陶器碗（5）が1個体分出土する場合もあった。これらの遺物から方形土坑群は13世紀後葉から14世紀前葉のものと考えられよう。

戦国・江戸時代の遺構には、方形土坑6基と溝1条がある。この時期の方形土坑は長辺が4mを超えるような大形のものが多く、平面形は鎌倉・室町時代のものに比べ不定形で、階段状に掘り込まれている。S K 25の上層からは馬骨が出土した。S K 07は出土した土師器皿（6）から15世紀末～16世紀前葉、S K 96は出土した瀬戸美濃窯産陶器皿（7）から16世紀末～17世紀初頭に位置づけられることから、戦国時代を通じて方形土坑が営まれていたことが判明した。人骨などはまだ確認されていないが、鎌倉・室町時代のものと同様、墓坑であったと想定される。



古墳時代全景 (北から)



S Z 04など (東から)

まとめ 今回の調査成果をまとめると、以下のようになる。

1. 古墳時代中期から後期にかけての低湿地部での群集した古墳群を検出した事例は珍しく、古墳は低墳丘の周溝墓の形状となっている。既に存在が明らかとなっている同時期の県指定史跡検見塚 S Z 1002 や S Z 1001 との関係が注目される。
2. 鎌倉・室町時代の方形土坑群は、過年度に調査された土坑群との関連が問題となる。該期の墓域が当地点まで展開していたと考えられる。
3. 戦国時代の方形土坑が確認されたことは、該期の墓制を考える上で重要である。この地点が近在する清須城下町に伴う墓域であった可能性が考えられる。

(福岡晃彦・宮腰健司・鈴木正貴)

